2018-09-02 ＠愛媛大学城北キャンパス

改訂版(2018-09-03)

機能主義の職業心理（occupational psychosis）に抗して―J・I・キツセのレガシーを振り返る

関西大学総合情報学部 中河 伸俊

nobunaka@res.kutc.kansai-u.ac.jp

【報告要旨】

昨年『社会学評論』誌上で「社会学と構築主義の現在」と題する特集が組まれたが[1]，そこで提示されたさまざまな議論は，それぞれ示唆的かつ今後の展開の可能性に富むものであるとはいえ，本報告者には，社会問題の構築主義的研究の創始者のひとり，ジョン・イツロウ・キツセのレガシーを十分正当に取り扱っているとは，必ずしも思えない。本報告では，ラベリング論の創唱者のひとりでもあるキツセが，その学的生涯を通じて何と戦い，どのような種類の社会学的探究を可能なものにしようとしてきたか。また，「構築主義論争」と呼ばれたポストモダン論の影響下の方法論的バトルロイヤルのどこで有意義な貢献をし，どこで踏み誤ったかを再点検したい。そうした点検は不可避的に，キツセらの構造機能主義批判（これは過小評価されすぎている）の先に，どのような”機能主義抜き”の探究の様式が構想できるのかという，きわめて先鋭な方法的課題と結びつかざるを得ない。

１）キツセの機能主義批判のレガシー

2003 年に 80 歳で死去したジョン・キツセ（【コラム１】にその略歴を掲げた ⇒p.8～）は，晩年に過去を振り返って，「私の学問的キャリアは，主流の機能主義，とりわけマートン学派のそれに対する挑戦を通じて築かれた」と述べたことがある。その挑戦とは，具体的には，1960 年代に逸脱の社会学の分野でラベリング（レイベリング）論の主唱者の一人になった

[1] 『社会学評論』269 号（=Vol.68, No.1, 2017 年 6 月発行）の特集「社会学と構築主義の現在」所収論文は以下の通り： 松木洋人「家族社会学における構築主義的アプローチの展望―定義問題からの離脱と研究関心の共有―」，北澤毅「構築主義研究と教育社会学―『言説』と『現実』をめぐる攻防」，濱西栄司「構築主義と社会運動論―相互影響関係と回収可能性―」，上野加代子「福祉の研究領域における構築主義の展開」，佐藤哲彦「逸脱研究の論点とその探求可能性―ディスコース分析をめぐって―」，芦川晋「『自己』の『社会的構築』―昔から社会学者は『自己の構成』について語り続けているが一体どこが変わったのか？―」，赤川学「社会問題の歴史社会学をめざして」，小宮友根「構築主義と概念分析の社会学」

こと，そして 70 年代に，実証主義者と左派から挟み撃ちの批判[2] を受けて退潮したラベリング論の再チャレンジともいえる形で，社会問題の社会学における構築主義アプローチの確立に先導的な役割を果たしたことを指す。1960 年代に登場して逸脱研究の“パラダイムシフト”とさえいわれたラベリング論は，回顧的に（つまり後知恵で）いうなら，時の政権の大きな政府路線と共振して政策への影響力を誇ったマートン学派が，その機能分析の対象となる実体として措定した非行や犯罪, 精神疾患, アルコール依存等々の「逸脱行動」を，デュルケムやレマートの犯罪論を補助線に，相互行為的な達成物（interactional accomplishments）として捉え直そうという試みだった[3] 。ラベリング論者は，そうした「逸脱」を産出する相互行為の核心をなすのは，公的な社会統制活動に携わる者による類別とレッテルの貼り付け（逸脱的カテゴリーの適用）という言語行為の実践だと考えた[4] 。キツセは，ラベリング論者の中でもとくに，こうした相互行為論な視点を守ろうとする姿勢が顕著だった[5] 。

今なお社会問題研究における構築主義アプローチの基本文献とされる『社会問題の構築』（Spector and Kitsuse 1977=1990）では，マートンの機能主義への批判は，より直接的なものになった。パーソンズやマートンの社会学的機能主義（構造機能主義とも呼ばれた）は，コント～デュルケムの＜社会＝有機体＞のメタファーを社会システムという概念に衣替えして科学化する試みであり，1950 年代から 60 年代にかけて社会学理論の主流のパラダイムになった。マートンは，彼が編んだ社会問題の社会学の標準的教科書（Merton and Nisbet 1966）所収の論考で，社会問題を，専門家（社会学者）によるシステムの機能診断によってのみ明らかにできる，システムの機能要件の不充足を指す社会解体や，システムの働きを阻害する逆機能として定式化した。対して，スペクターとキツセは，そうしたアプローチは，「事象Ｘは社会問題だ」と研究者が判断するためには，①その事象の問題性に関連する社会システムの境界や目標や機能要件の同定，②その事象の当該のシステムと各種のサブシス

---

[2] 左派からの批判の例として，『社会学の再生を求めて』でのグールドナーのラベリング論批判（Gouldner 1970=1974,1975）や，新犯罪学派（ジョック・ヤングら），批判的犯罪学派（オースティン・タークやリチャード・クィニー，ウィリアム・シャンブリスら）からの“コンフリクト理論”に軸足を置いた論難が挙げられる。

[3] こうした論旨のラベリング論を掲げたキツセやベッカーらの論考は，マートン流の機能主義者が力を持つ既成の社会学の諸誌からはリジェクトされたが，比較的歴史が浅かった『社会問題』誌（1951 年設立）がそれらを受容し，同誌を刊行する社会問題学会（SSSP）は，その後ラベリング論者／構築主義者の牙城となった（Spector 1976）。

[4] マートン学派を含むそれまでの逸脱研究は犯罪や非行等の公式統計を使って考察を行ったが，そうした統計の基盤になるフォーマルな社会統制の機関内のレッテル貼り（逸脱のカテゴリー付与）活動の現場を研究すべきだと，キツセとシクレルは論じた。その提案はのちに，シクレル自身やエマーソンなどの刑事司法過程のフィールド研究によって実践されている（Cicourel 1968; Emerson 1969）。

[5] ラベリング論は，シカゴ学派～ネオシカゴ学派（一般にシンボリック相互作用論=SI と呼ばれる）の学的系譜の中から登場したが，キツセは，ガーフィンケルがいた UCLA に在籍し，シクレルやエマーソン，ポルナーなどと交流した結果，SI の道具立てにエスノメソドロジーの「耳学問」を加味した形で，その方法論上の議論を展開することになった。

テムにとっての正負の機能連関の評定，③そうした機能的不充足状態は避けがたいものではないことの提示といった，経験的裏付けを示してクリアするのが極めて困難な諸前提を含むものであるため，実用不可能だと指摘した（詳しくは Spector and Kitsuse 1977=1990 の 2 章，および，中河 1999 の 1 章を参照のこと）[6]。このようにして，従来の社会問題研究は分野に固有の研究対象の同定に失敗してきたと述べたあと，キツセとスペクターは，社会のメンバーによるクレイム申し立て活動（claims-making activities）と，それに呼応したり反対したりするさまざまな反作用活動を「社会問題活動」として調査研究の対象にするという，新たな研究プログラムを提案した。さまざまな個人やグループ・機関による「自分たちが取り上げる特定の社会的な出来事や状態は，困ったもしくは不当な，ほうっておけない，解決が求められる事態，すなわち社会問題である」という公的の場での訴えかけをきっかけとして繰り広げられる社会過程を，その主張の当否の判断（それは必然的に機能診断や規範的吟味のような作業を要請するだろう）は括弧に入れて（つまり脇に置いて），調査し分析しようというのである。この提案を起点にして形作られていったいわゆる「社会問題の構築主義」は，1980 年前後以降，活力に富む社会問題研究の一アプローチになった。

そうした「成功」の最中に勃発したのが，科学社会学者ウールガーらが口火を切り（Woolgar and Pawluch 1985a=2000,1985b），当時流行のポストモダニズムやポスト構造主義，脱構築論等の影響下に繰り広げられた構築主義論争である（Kitsuse and Schneider 1989; Best 1989; Holstein and Miller 1993; 中河 1999）。この論争の中で，社会問題の構築主義学派は，いわゆる厳格派とコンテクスト派に分かれて方法論上の論争を繰り広げる態になり[7]，キツセは厳格派の旗頭として論陣を張った（Ibarra and Kitsuse 1993=2000）。

２）機能主義の職業心理―キツセは何と戦い，どこで誤ったか

職業心理（occupational psychosis）はジョン・デューイの造語らしいが，ここでは『永続と変化』でのケネス・バークの用法（Burke 1984）に倣って（もしくはそれを横領して），社会学者が社会工学的な方向での「社会貢献」を念頭に置くとき採用される，「見ているが見えていない」自明の想定群を指すために使う[8]。国家や自治体の行政機構や企業を含む各種

---

[6] 社会問題をどう定義するかをめぐって，スペクターとキツセは同書で，このようにして機能を基準とするアプローチを批判したあと，社会問題を規範の違反と見る規範的アプローチ，文化コンフリクト論の論理構成をとる価値葛藤アプローチを批判し，またベッカーらの従来のラベリング論の方法論上の不備を指摘した。

[7] そこにさらにポストモダン批評，脱構築論，批判理論，フェミニズム，エスノメソドロジー，制度のエスノグラフィー（ドロシー・スミス），多声的エスノグラフィー論等々，さまざまな立場の論者が招きこまれて，落としどころの見えないバトルロイヤル状態になった。ちなみに，「厳格派構築主義者（strict constructionist）」と「コンテクスト派構築主義者（contextualist constructionist）」というラベルを作ったのは，この論争の一方の当事者であるジョエル・ベストであり，そしてその命名には，論争において暗黙裡にベストの主張への共感を産む効果があると筆者は感じる。しかし，広く流通してしまっているので，ここでも仕方なくこのラベルを使う。

[8] バークは，『永続と変化』の職業心理の章で，彼以前の用語でいえば存在被拘束性にあたるよ

の官僚制組織（もしくは公式組織（フォーマル・オーガニゼーション））の発達は，近代社会の一特徴としてウェーバーのような古典社会学者が特筆大書するところだったが，その趨勢は，その種の大組織の運営上のニーズに呼応する諸学の揺籃にもなった。パーソンズやマートンの社会学的機能主義[9] もまた，単に「社会とは何か」の解明や考察を目指すだけでなく，大規模な組織（とりわけ公共的な事柄に業務として携わる行政組織）の意思決定に資する専門的知見の提供を念頭に置いてデザインされていたといえるだろう[10] 。とりわけ，マートンの機能分析についてみれば（Merton 1957=1961; Merton and Nisbet 1966），(a)「問題解決」をして処方箋を提供しなければならない，(b)「解決すべき問題は何なのか」を明らかにするにはまず機能診断のような，社会学者による理論的診断をしなければならない（いわゆる「アセスメント」の発想の社会理論版），という少なくともデュルケムの『自殺論』にまで遡ることができる二点が，その議論の初期設定に埋め込まれていた。

70 年代に「社会理論」のパラダイムとしての機能主義が退潮したあと，米国の社会学界は，大掴みにいえば，一方にさまざまな小パラダイム[11] が台頭して併存し，他方でそうした理論的プラットフォームを要しない「実証主義的」なピースミールの計量研究が隆盛を誇るという構図になった[12] 。しかし，機能主義的な想定が官僚制組織のニーズに応えようとする社会学者の職業心理[13] に根差したものだという理解が正しいなら，そうした想定がにわかに消え去るはずもない。そして，学界内（日米を問わず）での社会問題の構築主義への

うな事柄について，コミュニケーション論的に語ろうとした。彼によれば，デューイの職業心理は，ヴェヴレンがいう「訓練によって獲得された無能力」と同じである。「ものを見る方法は同時に，ものを見ない方法でもある。対象 A に焦点を絞ることによって，必然的に，対象 B は無視されることになる」（Burke 1984: 49）。バークは，現代の優越的な心理は，テクノロジー的心理（technological psychosis）だという。これは，フランクフルト学派の道具的理性と重なり合う（しかしコミュニケーションのスタイルの問題として発送されているという意味でより社会学的な）概念といえるかもしれない。（なお，このサイコシスには精神病理的なニュアンスはないから，マートンの『社会理論と社会構造』の官僚制の逆機能を論じた箇所に出てくるこの語が「職業的精神異常」と訳されているのは(Merton 1957=1961 訳書 pp.181-182)，時代的にやむをえなかったのかもしれないが残念な誤訳である。）

9 この種の機能主義の発想は，政治史学者の三谷による「明治期の機能主義的思考」についての考察を受け入れるなら（三谷 2017 の 4 章），当時の米国の社会学に特有のものとはいえないだろう。なお，三谷によれば，機能的等価物（functional equivalents）という概念は，古くウィリアム・ジェイムズにまで遡れるという（同書 p.217）。

10 そして，マートンの非行と犯罪についてのアノミー・ストレインの議論は，実際に，コーエンやクラワードとオーリンの修正を経たりもしつつ，とりわけ都市の「問題地域」を対象とする施策の裏付けとして採用されるという成果を挙げていた。

11 交換理論，コンフリクト理論，シンボリック相互作用論，構造主義，現象学的社会学，エスノメソドロジー，フェミニスト社会学 etc. 。

12 そうした趨勢が社会学理論の低迷化をもたらすことを危惧して，1983 年には，理論と方法論に特化したアメリカ社会学会のジャーナル，『*Sociological Theory*』が創刊された。

13 身近な話でいえば，科学研究費の申請時や業績審査書類の作成時に，自分の研究の社会的意義や社会貢献についてどのように記述するかを思い浮かべてほしい。筆者が職業心理というのはつまりは，そうした特定の言説の様式のことである。

根強い反発[14] と，より融和的な形で，従来の社会問題研究の枠組内に構築主義アプローチを回収しようとする試み[15]（構築主義アプローチは結局のところ，これまでの社会構造的視点からの客観的な社会問題研究を，当事者視点に代表されるような社会問題の主観的側面に目を向けて補足する試みだとする取扱い[16] が一つの定石だった，なお主観／客観の区分については【コラム２】を参照のこと ⇒p.10～）は，そうした職業心理の現れだといえる 。

ウールガーらの「構築主義者は存在論上の境界の恣意的設定（オントロジカル・ゲリマンダリング）をしてきた」という批判（これは広く認識されてはいないがじつは社会問題の構築主義だけでなく，社会学な的説明一般にみられる言説実践のクリティークだった； Woolgar and Pawluch 1985a=2000,1985b）は，機能主義批判を通じてキツセらが示した社会問題の構築主義の公準を，そのアプローチに基づく諸研究はひそかに破り続けてきたとして，社会問題の構築主義の本来的困難性を示唆するものだった（オントロジカル・ゲリマンダリング=OG については【コラム３】を参照のこと ⇒p.11～）。この批判を受けた論争の中で，キツセは弟子のイバラと共に，存在（社会的状態）から切り離された言説のレベルの現象である「社会問題のレトリック」の分析（Ibarra and Kitsuse 1993=2000）を，という新路線を提案し[17] ，それに沿って研究を進めることでウールガーらの OG 批判をかわせると主張した。構築主義論争を契機にして露呈したキツセの方法論上の「よくない点」のうち重要と思われるものとして，とりあえず，①かっこ入れ（bracketing）もしくはエポケーという現象学的社会学から借用した学的な対象認識の方法，②一貫した「一般理論」への志向，③言説をそれがその中で使われる具体的な活動から切り離して分析することを推奨する非相互行為論的な「意味」へのスタンスの三つを挙げた

---

[14] 筆者は，日本社会病理学会においてそれを身をもって体験している。

[15] 後者の「より融和的な形で，従来の社会問題研究の枠組内に構築主義アプローチを回収しようとする試み」のうち、もっとも共感的かつ洗練されたものとして、徳岡秀雄の構築主義への対応を挙げることができる（徳岡 1997）。

[16] もちろん，そうした主観／客観の割り振りは誤っている。客観主義的な社会問題研究は方法論上に成り立たないことを，キツセらは示したからだ。であるがゆえにこそ，「われわれは，状態の理論ではなく，クレイム申し立て活動の理論を築き上げることに関心があるのだ。したがって，われわれにとっての客観的状態の意義は，その状態について主張が行われているという点にあるのであって，たとえば科学者の場合のように，ある独自の見地から，その主張についての妥当性を判断することにあるのではない。状態の考察への後もどりを防ぐために，状態そのものの存在さえも，社会問題の分析にとっては関わりのない，外的なものであると考えたい。想定された状態が完全なでっちあげ――嘘――であったとしても，その申し立てを受けた人びとが自ら分析を開始し，それがでっちあげであるということを発見しないかぎり，その状態の真偽について，われわれは非決定の立場を取りつづける。」（Spector and Kitsuse 1977=1990 訳書 pp.120-121）社会問題の構築主義が提案した研究プログラムの転換は，デュルケムが『宗教生活の原初形態』で，宗教の本来を信憑や教義ではなく，それらを活動の素材にした具体的・実践的な儀礼の過程に見るべきだと喝破したのと，ある意味で似ているといえる。宗教的儀礼の経験的研究にあたって，いったいどの人類学者や社会学者が，儀礼の中で崇敬されたり調伏されたりする神仏や祖霊や悪霊などの「客観的実在性」を俎上にあげて論じようとするだろうか。

[17] なお，イバラとキツセやベスト，ガスフィールドなどによる社会問題のレトリック分析の網羅的紹介としては，林原（2013）が出色である。

い。いずれについても詳説する紙幅はないが，①は，シュッツが多元的現実論を踏まえて提示した一次的構築／二次的構築という二階建ての社会科学論を，初期エスノメソドロジー経由で継承したものである[18]。②は，『社会問題の構築』における分析的帰納法（グラウンデッド・セオリー法の学的乳母きょうだい）に依拠しての社会問題の自然史モデルの提案から，上記の社会問題のレトリックの一般理論の探究の提案にいたる，科学主義的といいたくなる「理論」偏重の姿勢である（この点については Bogen and Lynch 1993 の適切な批判がある）。③は，最後期のレトリック論限定の問題点で，ウールガーらの批判への過剰防御の結果といえるだろう。

コンテクスト派を自称するジョエル・ベストは，上記のような「厳格派」の弱点（とくに①③）を見逃さなかった。どだい完全に守るのは無理な「公準」を守るためにレトリック研究に特化してモノグラフ研究をやめるのは，盥の水と一緒に赤子を捨てるようなものだというベストの言い分には一理がある（Best 1993，小宮 2017 もこの点においてベストを評価する）。とはいえ，社会問題の構築主義の公準を柔軟に取り扱うというベストの立ち位置は曖昧かつ微妙だ。「コンテクスト派の構築主義者はクレイム申し立てを，その文化と社会構造の文脈（コンテクスト）の中に置いて研究する」（Best 1993 p.139）と彼がいうとき，この文化や社会構造はいったい何を意味するのか。社会問題をめぐる活動を文化や社会構造が生み出すという説明図式を取ることを許すということであるなら，それによって，隠れ機能主義へのバックスライドさえ可能になるのではないか[19]。ラベリング理論の草創期以来，相互行為論的

---

[18]「構築主義的説明（さらには社会学的説明一般）は，社会文化的な社会の状態Ｘをノーチェックで恣意的に客観的実在として位置づけ，それを使って現象Ｙの“社会的”な構築過程を説明している」というウールガーとポーラッチの批判に対して，「厳格派」キツセは，注意深いかっこ入れを，その対処法として挙げた。より詳しくいえば，社会問題の構築過程の主要登場人物であるクレイムメイカーＺの，「現象Ｙは実在し，社会的に解決されなければならない問題だ」というクレイムに示される認識は“括弧入れ（エポケー）”されなければならない。つまり，研究者は，まず第一にＹの実在性についての判断を停止しなければならないというのが，キツセらが掲げた構築主義の公準だった。キツセは報告者に，「構築主義的な分析は反直観的 anti-intuitive なものだ」と繰り返し語った。また，対象について常識的な先入見を排して考察するのはとてもむつかしいとも。しかし，①現象学者は「純粋意識の領域」での内省的作業のために自然的態度の判断停止を行おうとしたのであって，対象の社会学的考察のためにそれを行おうとしたのではない。②先入見を排する，というテーゼは，むしろオーソドックスな科学主義の主張に似通っているし，そして，③そもそも社会的な事象（対象）は，私たちが常識的知識を利用することによってしか立ち現れて来ない。「問題な状態」の実在性についての判断停止を示すために，キツセたちは，「（問題な）状態だとされるもの（putative conditions）」というもってまわった言い回しを使ったり，クレイム申し立ての中で問題だとして取り上げられている事柄を「」で括ったりしたが，いうまでもなく，論文の記述に出てくるあらゆる事象に「」をつけたら，ナンセンスな文章が出来上がるだけだ。なお，シュッツの一次的構築／二次的構築論は，社会科学者の分析・考察は，日常世界の中での人びとの一次的構築を対象＝データにして，それを学問の世界の枠組みや規則に沿って再構成した二次的構築物だという考え方で，そこから，社会学的探究のためには，日常世界における常識的態度のエポケーが必要だという考え方が導かれる（現象学的社会学者以外でこのシュッツの二階建ての図式を援用するものに，盛山 1995 がある）。

[19] さらに，キツセとベストの対立点には，「問題」とされる状態を表示するものとされる統計

な視点を堅持し，機能主義の職業心理と戦いながら新しい探究の様式を生み出してきたキツセにとって，こうしたベストに代表される動きは受け入れがたいものだった。

３．ポスト機能主義の社会学

筆者は，1970 年代後半以降に出てきた，社会構築主義と自称・他称されるさまざまなタイプの探究プログラムの提案（たとえば，科学的知識の社会学（SSK）やジェンダー／セクシュアリティの社会学，感情の社会学，社会心理学やナラティヴセラピーなどでの社会的構築をめぐる主張等々）は，社会学主義（sociologism；【コラム４】を参照のこと ⇒p.14）の現代的な（つまり言語論的転回を経た）一発現形態だったとみる立場をとる（中河 2013）。1960 年代末から 70 年代前半の「政治の季節」に，機能主義パラダイムが十分な方法論的吟味によってではなく，時の勢いで凋落していったのは（そうした時の勢いを象徴するのが Gouldner 1970=1974,1975）[20]，いま思えば，少なくとも社会学の方法論にとっては不幸なことだったと思われる。上記の構築主義論争は，そこからトレンディなポストモダンや現代思想の熱狂（ファッド）を差し引くなら，社会学の経験的探究はどのようなものであるべきなのかを掛け金にした社会学主義の方法論的再吟味，つまりはもっと前に行われるべきだった“ポスト機能主義の社会学をめぐる，遅れてきた方法論争”として位置付け直すこともできなくはないだろう。

社会学の分野（ディスプリン）としての方法論的プラットフォームは不確定なまま（小パラダイムたちは自身の蛸壺の中で本領安堵に腐心するだけ，というのは言い過ぎか？），機能主義の職業心理は衰えをみせないという現況の中で[21]，筆者は，構築主義（社会問題の構築主義ではなくより一般的なタームとしての）という不明確な呼称を足がかりに，方法論をめぐる議論が進展して行くことを願う。そうした議論の中で，私が賭けのチップを置く方法的立場は，少なくとも，①内側からの組織化の視点（ルーマン，エスノメソドロジー／概念分析，ゴフマン，そし

の取り扱いや，社会問題活動の過程への研究者の参入の問題（スペクターとキツセは，構築主義者は調査対象とする「社会問題」についてクレイムメイカーの主張を否定 ironize しないという立場をとるべきだとした）をめぐるものがあるが，これについては本格的な立論が必要なため，本報告では【コラム５】（⇒p.14～）で表層をなぞるだけにとどめる。

[20] ラベリング論者のハワード・ベッカーまでもが，そうした時の勢いにあおられた態度表明をしている（Becker 1967）。

[21] こうした隠れ機能主義（あるいは機能主義から先祖返りしたシカゴ学派の社会解体論の水準の隠れプレ機能主義）とでも呼ぶべきものは，自覚的でないからに対処に困る。マートンの等価機能主義の議論は，明確かつ洗練されたものであったため，スペクターとキツセが有効な批判を行うことができたが，こうした職業心理のレベルの想定は，そうしたものであるがゆえに bulletproof であるからだ。そういう意味では，著名な中堅の社会学者が，ルーマンまでを視野に入れ，マートンからヴァージョンアップした等価機能主義に基づく社会学のテキストの刊行準備をしているのは，まことに楽しみなことである。そこには水準の高い構築主義批判も含まれるようなので，刊行されれば，「厳格な構築主義」の立場からの反批判ができると，筆者は手ぐすねを引いている（とはいえそれが刊行される時点では，筆者はすでに引退しているかもしれないのだが）。

てたぶんフーコーとブルデューにはそうした視点がある）[22]，②因果モデルに代わる意味とコミュニケーションを介した出来事の継起モデル（中河 1999, 2001, 2004），③計量の比較法から記述のための比較法へ，④社会工学的発想に代わる新たな社会学的知見の応用のヴィジョン（中河 2004），といった諸点をクリアしたものでなければならない。とりわけ，このような方向で「社会学のやり方」のオルターナティヴを定式化するという企図に共感的な者にとっては，ラベリング論から社会問題の構築主義へと至るJ・I・キツセのレガシーは，いまだに再訪するごとに得るものがある貴重な鉱脈だといえるだろう。

【コラム１】 ジョン・I・キツセの略歴

John Itsuro Kitsuse: 1923, Imperial Valley, California, US – 27 November 2003, Santa Cruz, US

○1923　鹿児島に近い宮崎の都城からの移民の子として生まれる（日本名は「喜津瀬逸郎」？）；本人によれば，父とおじは日系人野球チーム（フレスノ野球団？）の選手で，長距離の遠征試合にも参加したという

○1942-43　日系二世だったため，家族とともにマンザナー強制収容所に１年間収容；収容所を出たあとマサチューセッツ州に移住，ボストン大学で化学を専攻する

○兵役に服したのちGIビルでカリフォルニア大学ロサンジェルス校（UCLA）に入り，『社会学』（今田隆俊訳，ハーベスト社，1987）の訳書があるレオナード・ブルーム（Leonard Broom）の指導の下に修士号と博士号を取得

○1956　以前からそのテーマの研究をしていた師ブルームと共著で，戦時下の日系人家族のケーススタディ，『不慮の災難への対処』（*The Managed Casualty: The Japanese-American Family in World War II*, University of California Press）を刊行（同書は，政府の調査機関の紐付きではない日系人研究の最初期のものとして評価されている）

○ワシントン大学，サンディエゴ州立大学で教えたあと，1958 年ごろからシカゴのノースウエスタン大学の教授に（のちに共同研究者になるマルコム・スペクターは，このノースウェスタン大時代の教え子）

○1962　論文「逸脱行動への反作用」（"Societal Reaction to Deviant Behavior: Problems of Theory and Method," *Social Problems*, Volume 9, Issue 3, pp.247–256）

○1963　アーロン・シクレルとの共著論文「公式統計の使用についての一考察」（"A Note on

[22] これは，相互行為は相互行為の内側から組織化され（ex.システムの自己組織化），そしてそうした相互行為の中で／相互行為を通じて"社会的事実"構成（もしくは達成）されるという視点である（その分かりやすい絵解きは，たとえば，Francis and Hester 2004=2014）。この内側からの組織化の視点を取ることによって，社会学方法論は，方法的個人主義か方法的全体主義か，トップダウンかボトムアップかといった年来のいわゆる「ミクロ=マクロ問題」から決定的に解放される。

the Uses of Official Statistics," *Social Problems,* Volume 11, Issue 2, pp.131-139）； 以上の二論文で，キツセは，ハワード・ベッカー，カイ・T・エリクソンと並ぶいわゆるラベリング論（キツセ自身は「社会的反作用アプローチ」と呼んだが）の提唱者三羽烏の一人と目された

○1963 前後　フルブライト基金で訪日，少年刑務所での内観法の応用について山村賢明と共同研究，その成果の一部は，論文「現代日本における個人的責任の意識」として公刊された（山村，キッセ『社会学評論』1963 年 14 巻 1 号 p. 79-90）

○1963　アーロン・シクレルと共著の『だれが進学を決定するか』を刊行（*Educational Decision Makers*, Cicourel and Kitsuse 1963=1985）

○1973　マルコム・スペクターをシニアオーサーとする共著論文「社会問題の再定式化」（"Social Problems: A Re-Formulation," *Social Problems*, Volume 21, Issue 2, pp.145–159）を発表，社会問題への構築主義アプローチの方法論の整備作業を開始する（当初二人はそれを，「社会的定義アプローチ」と呼んだ； ちなみに，同時期にこのアプローチの形成に貢献したキツセ／スペクター以外の主要な論者として，ハーバート・ブルーマー，ジョーゼフ・ガスフィールド，そして医療化論のピーター・コンラッドとジョーゼフ・シュナイダーらが挙げられる）

○1974　カリフォルニア大学サンタクルーズ校の教授に（のち社会学科長などの要職にも）

○1975　ゴーヴが編んだラベリング論への実証主義的批判の書，『逸脱のラベリング』（*The Labelling of Deviance*）に寄稿，「（公的な社会統制活動の一環としての）ラベリングは逸脱を促進するか，抑止するか」という同書における議論の土俵の設定自体が，社会的反作用アプローチが研究しようとすることとは別の事柄だと論じた

○1977　社会問題への構築主義アプローチの教科書『社会問題の構築』（Spector and Kitsuse 1977=1990）を刊行，従来の機能主義的な社会問題研究を方法論的に批判したのち，クレイム申し立て活動を研究対象とする新しい社会問題の調査研究のやり方を提案，事例研究の例を示すとともに，そのアプローチに沿った社会問題の社会学の授業のやり方を提案した

○1978-1979　アメリカ社会問題学会会長（会長就任スピーチのタイトルは，「そこら中からカムアウト=Coming Out All Over」）

○1984　シュナイダーと共編の『社会問題の社会学の研究』（*Studies in the Sociology of Social Problems*, Ablex）に，モノグラフ論文「帰国子女―日本における教育問題の創発と制度化」（アン・ムラセ，山村賢明と共著）を寄稿

○1990　『社会問題の構築』の日本語版刊行（邦訳の経緯を記しておくと，キツセがサンタクルーズの院で指導していた森俊太に全訳させた草稿を，山村賢明に見せて日本語版の出版について相談(85，6 年？)，しかし山村はそのままでは出版は無理と判断し，当時ラベリング論の紹介では第一人者だった宝月誠―おそらく山村の仲介でサンタクルーズのキツセのところで在外研究をしたことがある―に草稿を回して相談，宝月はベッカーの『アウトサイダーズ』の訳者の村上信之に訳業を依頼した；場所は京都大学の宝月研究室だったような気がするが，上記の依頼の場に鮎川潤と中河も居合わせ，村上は，この二人と共訳ならということで―鮎川はラベリング論者，中河は留学帰りで多少英語ができた―依頼を引き受けた； そのあと，キツセは数回来日し，訳者チームと会って訳業の進行を督促，

語学的な事情で面談の受け役になり，大いにプレッシャーを感じるとともに，いちばん強く構築主義の「折伏」を受けた中河が，最終的に作業のまとめ訳を買って出て，森草稿を全面的に近い形で改訳した『構築』が刊行の運びとなった； なお，マルジュ社から刊行されたのは，村上が，『アウトサイダーズ』を担当した新曜社の編集者が独立して作った同社から出すことを強く推したからである）

○1991　サンタクルーズ校を退職，名誉教授に

○1993　時期的にキツセの退官記念論集にあたる『社会構築主義再考』に，ピーター・イバラとの共著論文「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」（Ibarra and Kitsuse 1993=2000）を寄稿； 同書の収録論文のほとんどがこの論文にコメントする形で書かれているため，いわゆる「構築主義論争」の主要な著作の一つとして扱われることに（ただし，この論文はスティーヴ・ウールガーとドロシー・ポーラッチの 1985 年の論文「オントロジカル・ゲリマンダリング」とその続編（Woolgar and Pawluch 1985a,b）へのリプライとして書かれたものなので，論争の発端は通常その論文とされる）

○2003　卒中の後遺症の右半身麻痺のため，長年車椅子でリハビリをしつつ活動していたが，この年の秋に再三の卒中の発作のため死去

★キツセは，学校での進路指導を調べたシクレルとの共同研究にも示されるように，「カテゴリーの使用」に焦点を合わせるとはいえ，基本的には，オーソドックスな自然主義的観察によって組織のフィールドワークを行うタイプの調査研究者だった（「新しいフィールドに入ったら最低一月は，インタビュー等の能動的な調査活動はせず，その場で起こっていることをじっと観察する。そうするとその場で起こっていることが見えてくるようになる」と，筆者は教示された）

★★共同執筆をしたときには，きわめてひんぱんに後輩や教え子にシニアオーサーをゆずった

★★★日系二世であるため（おそらく初歩段階の母語保持教育を受けたが，読み書きは習わなかった），米国人としての自己認識と日本の文化と社会へのロマンティックな（失礼）思い入れを併せ持つ人だった

ジョン・キツセ氏 in Japan

【コラム２】主観的と客観的

社会学の方法論をめぐる議論の中で，できるものならば早急に使用禁止にしたいと筆者が強く思うのが，「客観的（objective）」と「主観的（subjective）」という対概念である。

「主観的」という形容は（「主観」については大層な哲学的思惟の歴史があるが），方法論の文脈では，個人的な思い込みであって普遍性が乏しい，という意味で使われることが多い。いっぽう，「客観的」はしばしば「真理」と等号で結ばれる。客観的真理とは，①すべての主観に承認されるべき普遍的妥当性が論証された真理，もしくは，②客観的実在を多かれ少なかれ正しく意識に反映している知識のことであり（広辞苑），言い換えれば，(a)みんなの主観が一致すること（それって，間主観性とか共同主観性とかいうものではないの？ それとも，カント流にいえば，ああら不思議，理性の力で妥当な真理が人びとに共有されちゃう？）と，(b)主観（人の意識）に左右されない実在（モノ自体？）のあり方を反映した知識（科学的知識はそうしたものだとされる），の二つの異なった基準を持つ概念なのである（にもかかわらず，それをきちんと意識して使われることは少ないように思われる）。

主観も客観も本来，人の意識を介してしか立ち現れようがないものである。しかし，日常会話では，「それは単なるあなたの主観でしょう」とか「私はできるだけ客観的に事態を把握しようとしています」といった具合に，この対概念は相手の主張や見解を貶め（discredit），自らの発言や認識の正しさや妥当性を強調するためのレトリックの道具として使われる。「社会問題」をめぐる社会的なやりとりの中での，相対立するクレイムメイカーと対抗クレイムメイカーの論戦にも，そうしたレトリックの使用はしばしば登場する。ところが，社会問題の研究者の大方は「専門家」として，自分たちのディスコースをそうした論争の一段上に置こうとする。マートンの社会問題論にみられるような＜客観＝社会学者，主観＝一般の人びと（素人）＞という対概念の割り振りは，社会学者の認識をオートマティックに一般の人びとの認識より優位に置くためのレトリック上の操作だといわざるを得ないし，当然，キツセたちも『社会問題の構築』でそう指摘する。

【コラム３】 オントロジカル・ゲリマンダリング（いわゆる OG）

前置き① ゲリマンダリング（gerrymandering）： 政権担当者または多数党が，不自然にくびれた形や，飛び地を含めて 1 つの選挙区にすることで，その政党が最も有利になるように選挙区の境界線を確定すること。言葉の由来は，1812 年にアメリカのマサチューセッツ州知事ゲリー Gerry が行なった選挙区割りが，サラマンダー salamander（火の中にすむという伝説上のトカゲ）の形に似ていたことから，それをもじって，多数党に有利な恣意的な選挙区割りをすることをゲリマンダーするというようになった。（『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』より）

前置き② オントロジー＝存在論（ラ: ontologia，英: ontology，独: Ontologie，仏: ontologie）

もっとも広い意味では「存在一般」について論じること。ただし，「存在」という語の多義性に応じて「存在論」もまた多義的。 17 世紀にヨーロッパで作られた哲学用語で，18 世紀

以降にドイツでヴォルフ学派によって一般化される。彼らは，人間認識の第一原理を探究する形而上学を，神・自然・人間を対象とする神学・宇宙論・心理学と，およそ存在しうるもの一般を対象とする「存在論」に部門分けした。その際，存在一般は，矛盾律・充足理由律に従い，本質と属性をもち，現実存在はその可能性の完成と捉えられるなど，アリストテレ哲学や中世スコラ哲学の伝統を踏襲するものだった。

これに対してカントは，批判的理性の立場からヴォルフ学派のナイーブな独断性を斥け（対象が認識に従うというコペルニクス的転回），「存在」はリアルな術語ではない（「存在する」は性質の一種ではない）とする議論を展開したが，それとともに「存在論」自体も後景に退き，19 世紀においてもそうした趨勢は続いた。しかし 20 世紀になって，主に現象学や実存哲学において，「存在論」ということばが再興された。たとえばフッサールは，対象の本質に関わる学を本質学＝存在論（対象一般の本質に関わる形式的存在論と物質・生命・精神など実質的対象の本質に関わる領域存在論）とし，それらが経験に先立って意識においていかに構成されるかを論じる現象学を構想した。ハイデガーは，世界の内で存在者に関わりつつ実存する人間において「存在」が前もって了解されているとし，その存在構造を分析すること（基礎的存在論）によって存在の意味を探究しようとした。

こうした「新しい存在論」は，存在を開示する場として人間存在（志向的意識・原存在・実存など）に依拠している点に特徴があり，このことが現象学的還元や解釈学という方法の構想にも及んでいる。他方，こうした議論に対しては，基本的に科学的知識をモデルとする立場から，論理実証主義や分析哲学による強い批判がなされた。［以下略］（『哲学中辞典』和泉書院 2016 の藤谷秀執筆の項目から）

＊＊＊

ウールガーとポーラッチが，社会問題の構築主義的研究を網羅的にリビューしたのち，そこに共通する実践として提示したオントロジカル・ゲリマンダリング（①と②を組み合わせたかれらの造語）は，上記のような哲学的概念の歴史と，必ずしも密接にはリンクしていないように見える。

かれらは，社会的事象の研究者が，学問的な分析や考察や説明をするにあたって，その材料として用いられるさまざまな言及対象の存在論上の地位（位置づけ）を，「これは存在（実在）するもの」「これは単なる構築物」というふうに，自分の研究のストーリーライン（たとえば原因の説明）にとって都合がいいように割り振り，言い換えれば，存在と非存在（「ある」ものと「ない」もの）の境界線を恣意的に設定することを通じて，その学問的知見を成り立たせているのだと述べる。

言い換えれば，構築主義者はその社会的構築のスローガン（「人びとの認識の対象になるあらゆる客体は，社会的な ―社会問題の構築主義者の語法を使うなら相互行為的な言説実践を通じて産み出された― 構築物である」）に忠実に研究を進めようとするなら，あらゆる事象の存在論上の地位をかっこ入れするという徹底した相対主義的無関心の立場をとらなければいけないはずなのに，内緒で上記のような選択的無関心を導入するという“ずる”をしているというの

が，かれらのクリティークである。

構築主義アプローチをとる研究者のこのクリティークへの対応は，「注意深く研究を進め，研究対象を言説に絞りこむことを通じて「客観的状態」への全面的な無関心（エポケー）を維持し，ウールガーらが指摘したような“ずる”を回避できる」とする厳格派のそれと，「選択的相対主義は不可避なのだから，厳格派のように窮屈な縛りを研究に課して，産湯と一緒に赤子まで捨てる愚を犯すべきではない」とするコンテクスト派のそれに分かれた。

中河は，社会問題の構築主義の紹介段階ですでに，オントロジカル・ゲリマンダリングは擬似問題であり，そして厳格派，コンテクスト派のどちらも方法論上の問題点を抱えていると主張したが（中河 1999），構築主義アプローチの方法論上の問題については，その都度的に「経験的研究を進めるためにとりあえずバンドエイドを貼る」といった体の議論は行ったものの，十分に掘り下げた体系だった方法論的検討は行っていない。そのネグレクトの償いに，ここでゲリマンダリング問題について少しだけまとまったコメントをするが，その前に，論争に参加した者がみんな，哲学的知識が十分でないのに身の丈に過ぎる big words を振り回した結果，論争が空回りになってしまったきらいが大いにあるということを，回顧的に再確認しておきたい。

科学社会学者のスティーヴン・ウールガーは，一般には，近年アクター・ネットワーク理論で再び脚光を浴びている科学人類学者ブルーノ・ラトゥールの共同研究者として知られる。彼の社会問題の構築主義批判は，科学知識の社会学（SSK）の分野の構築主義者といってもいいエジンバラ学派のストロングプログラムを批判した後に，その余勢を駆って行われたものである。彼の立場は徹底した唯名論で（それに対してはエスノメソドロジストのウェス・シャロックの批判がある），つまりは，ことばによる命名と，命名の対象となる存在（モノ自体，のようなもの）とを切り離し，両者の関係はまったく恣意的なものとみる立場をとる（それがそうでなく，安定した一定のパタンを呈するように見えるのはじつは社会組織や権力などの作動の効果なのである）。そう考えるとき，何らかの対象についての語りは，存在としての対象に投錨することができない以上，本来的に語り手ごとのものでしかありえず，したがって，こうした「自己反省性（reflexivity）」を掲げる厳格な相対主義的な立場からの経験的研究の落としどころは，多声的（ポリフォニック）なエスノグラフィーということにならざるをえない（Woolgar 1993）。

構築主義は，言語論的展開（より正確には語用論的展開）以降の社会学の一つのあり方を体現するものであり，したがって，言語の使用（たとえばラベリングやクレイム申し立てによる社会問題の定義）に研究関心の照準が合わせられるのだから，唯名論（nominalism）と親和的なスタンスをとらざるをえない。とはいえ，ウールガーのような，徹底した唯名論を義務付けられているわけではない。フーコー系の哲学者，イアン・ハッキングが『何の社会的構築なのか？』（Hacking 2000=2006）を始めとする著作で提起したような，動的唯名論（dynamic nominalism）もしくは歴史的存在論（historical ontology）の立場をとって構わないのだ（なお，唯名論が必ずしもウールガーのような極端な相対主義の立場をとる必要がないという点については，中山 2009 も参照のこと）。

私たち人間が経験するさまざまな事象（対象）のほとんどは，歴史的に形成され継承されてきた言語的な（および副次的に図像やメロディ等々の非言語的な）リソースの相互行為場面での実際の使用を通じて，私たちの前に立ち現れる。そうした意味では，私たちの世界の中にある万象の存在形態は，構成物であるということを示す「」をつけて，「ある」と表示しなければいけないだろう。私たちは，言語文化的構成物である諸存在が形づくる世界に生まれ，その中で暮らしている。ただし，そうした「ある」に一定の類別があることにも，目配りをしておく必要がある。哲学者のピーター・ウィンチは，自然科学の研究においては対象についての解釈は研究者のものだけしかないが，社会科学の研究は，まず研究対象である（あるいは研究対象にまつわる）人びとの解釈があり，さらにそれについての研究者の解釈があるという二重の解釈性をその特徴とすると述べた（Winch 1958=1977）。これは，最近の実在論方面での用語を使うなら，自然科学の研究対象は自然種（natural kinds）であり，社会科学の研究対象は人間種（human kinds）だということである。ハッキングは，前者の自然種を無反応種（indifferent kinds），後者の人間種を相互作用種（interactive kinds）と呼んだ。研究者=専門家の命名や専門的知識に，前者は無反応だが，後者はしばしば反応を示すからだ。たとえば，精神病についての専門的知見は，精神病者のあり方や振る舞いに影響を及ぼし，そうして影響を受けた精神病者のあり方や振る舞いは精神医学者にフィードバックされる。こうしたプロセスを，ハッキングはループ効果と呼び（Hacking 2000=2006; 酒井他 2009），それを考察の核にした多重人格障害や狂気についての歴史研究を行った。このループ効果は（のちのハッキングとマイケル・リンチのやりとりの結果ハッキングも認めたことだが），1960 年代にラベリング理論が提起した“レッテル貼りがもたらす社会化”という視点と同型である。

以上の諸点を押さえておいて，オントロジカル・ゲリマンダリングをめぐる議論に戻るなら，私たちの世界が無数の「ある」によって構成されており，専門の研究者もそこから抜け出すことはできない以上（キツセは誤って現象学的なエポケーの努力によってそこから抜け出せると考えたが），社会問題の構築主義者がある種の「ある」についての想定（たとえばマリファナの薬物効果）をその記述と分析のリソースとして使ったことを公準違反とウールガーらが指摘したのは，無理筋の論難だった。私たちの世界には一般常識やローカルな知識に含まれる多くの「ある」があるが，その圧倒的多くは安定している（settled）。いっぽう，社会問題のクレイム申し立てはしばしば，そうした既存の「ある」に挑戦状を送りつけ（最初期のフェミニストの主張とそれに対する各方面からの反応を思い起こしてみてほしい），不安定な（unsettling）ものにする。私たちは，そうしたさまざまな「ある」についての知識を持っているからこそ，それを踏まえて，特定の既存の常識的「ある」を揺さぶる行い（言説実践）についても理解し，それについて記述することができる（中河 1999 で，OG1 と OG2 という区分を設けて言いたかったのもこのあたりの話である）。もちろん，「社会問題」をめぐる人びとの活動を記述し考察するには，クレイムメイカーやその他のアクターの言動をかれらの文脈の中で理解し把握するための注意深い努力が必要だが，機能主義的な職業心理に陥らずにそれをなしとげようとすることはべつに無謀ではないし，他の人文社会学的な調査の営為（たとえば人類学者の「フ

ィールドに入る」努力）に比べて特段に困難ともいえない。

【コラム４】 社会学主義

還元主義，つまりは，心理学，経済学，生物学や生理学等の他領域の知見に還元する説明様式に依拠することに反対し，社会学にはこの学問分野に固有の研究対象（この用語の創唱者デュルケムに倣っていえば sui generis な社会的事実）があるとする立場のことである。

言い換えれば，「社会学ならでは」の，他の学問分野にはない独自の種別の知見が提供できるという，一つの学問分野に携わる者にとって，ごく当たり前の主張だ。もちろん，ではその社会的事実（もしくは「社会的なもの」）とはどんな種別のものなのかというのが，方法論上の最重要の論点であり，かつ論争点になってきたわけだが，少なくとも，それが何でないかだけははっきりしている。個人単位の心理的傾性や属性に還元した説明様式をとる社会心理学的な研究（古くはデュルケムのタルド批判があるし，ホマンズの交換理論へのブラウの異議なども社会学主義的なものだといえるだろう），事象を下部構造（経済）に還元して説明する古典的な唯物史観，さらには，フロイト系の文化の理論や社会生物学は，社会学主義の立場からすれば，速やかに回避されるべき説明様式ということになる。

【コラム５】クレイムメイカーをアイロナイズしない？

従来の社会学者（たとえばマートン学派）は，積極的に現象Ｙの実在性について判断を下す。その結果，クレイムメイカーＺはその主観的認識に基づいて，客観的には実在しない「問題」について公衆に訴えかけている，と主張することもあるだろう（「それは偽の社会問題だ，現象Ｙは実在しない」と）。さらには，その「誤った」主観的認識の拠って来たるところについての社会学的説明を行うかもしれない。スペクターとキツセらそれを禁じ手にし，一方ベストはそれをゆるめて，社会問題の「実在性」についての合理的な見積もりをある程度行うことは認められるべきだと論じた（Best 1993）。

キツセらは，クレイムメイカーをアイロナイズしない（否定しない）をスローガンにして，現象Ｙの「ある」「ない」は判断せず，ただクレイム申し立てを含む社会問題活動の過程の記述と考察に専念する（川の水質汚染のクレイムも，キャンパスにセクシャルハラスメントが蔓延しているというクレイムも，宇宙からの侵略者が乗る円盤の基地が山中にあるというクレイムも，それが社会問題のクレイムであるという一点において，原理的に同等のものとして扱い，同じようにコミットもアイロナイズもしないと）。

マートン学派も，ベストも，クレイムの対抗状況下では，その「実在性の判断」と一致する主張をするクレイムメイカーには喜ばれ（ときにはその研究成果がクレイム申し立ての材料に繰み込まれさえするだろう），そして，一致しないクレイムメイカーには嫌われるだろ

う。　いっぽう，キツセらの構築主義の公準は，対抗状況下のどちらのクレイムメイカーからも喜ばれないだろう。アイロナイズはしなくても，問題とされる事象の実在性について判断停止し，つまりはそれが実在すると認めていないわけだから，自分たちのクレイム申し立てに賛同しない，という意味で「味方」ではない（「味方でなければ敵」？）。

それは，社会学的調査の「業」のようなものとして引き受けなければいけないのだろうが，研究者が，「宇宙からの侵略者が乗る円盤の基地が山中にある」という主張をするグループの言動を理解するために，かれらの考え方を「身につける」必要があるからといって，いっぽうで，常識的リソースを動員して「宇宙からの侵略者なんてありえないよね」と考えてはいけない，などということはない。さらには，その種の常識的な「ある」についての想定を，いっさい学術的なアウトプットから排するか，入れる場合は注意深くすべてをかっこに入れる，などという用慎も不要だ（そんなことをしたら，モノグラフなど書けない）。研究者の「アカデミックな世界」は，（とりわけ社会科学の場合，とはいえ自然科学の実践においてもエスノメソドロジストたちがつとに示してきたように）「日常世界」の知識を斥けることによってではなく，それに立脚することによって成り立っているのだから。ちなみに，ベストがそれによってベストセラーを手にした（Best 2001=2002）「悪い統計」の吟味による社会問題の「実在性」の見積もりというスキームは，それ自体が学問的な禁則事項ではないが，しかしそれは，社会学的探究の最終的なゴールにはならない，別の種類のおこないだろうと筆者は考える。

［参照文献］

Becker, S. Howard, “Whose Side Are We On?,” *Social Problems*, Vol. 14, No. 3: 239-247.

Best, Joel, 1989, “Afterward,” Pp.243-253 in *Images of Issues*, edited by Joel Best, Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.

―― 1993, “But Seriously Folks: The Limitations of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems,” Pp.129-147 in *Reconsidering Social Constructionism*, edited by James A. Holstein and Gale Miller, New York, Aldine de Gruyter.

―― 2001, *Damned Lies and Statistics: Untangling Numbers from the Media, Politicians, and Activists*, Berkley: University of California Press（林大訳『統計はこうしてウソをつく―だまされないための統計学入門』白揚社 2002）.

Bogen, David, and Michael Lynch, 1993, “Do We Need a General Theory of Social Problem?,” Pp.213-237 in *Reconsidering Social Constructionism* , edited by James A. Holstein and Gale Miller, New York, Aldine de Gruyter.

Burke, Kenneth, 1984, *Permanence and Change: An Anatomy of Purpose (Third edition)*, Berkley: University of California Press (originally published in 1935).

Cicourel, Aaron V., John I. Kitsuse, 1963, *The Educational Decision Makers*, New York:

Bobbs-Merrill（山村賢明・瀬戸知也訳『だれが進学を決定するか』金子書房 1985）.
Cicourel, Aaron V., 1968, *Organization of Juvenile Justice*, New York, Wiley.
Emerson, Robert M., 1969, *Judging Delinquents: Context and Process in Juvenile Court*, Chicago: Aldine.
Francis, David, and Stephen Hester, 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, London: Sage（中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根『エスノメソドロジーへの招待―言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版 2014）.
Gouldner, Alvin W., 1970, *The Coming Crisis in Western Sociology*, New York: Basic Books（岡田直之他訳『社会学の再生を求めて (1)(2)(3)』1974,1975 新曜社）.
Gove, Walter R.(ed.), 1975, *The Labelling of Deviance: Evaluating a Perspective*, New York: Halsted.
Hacking, Ian, 2000, *The Social Construction of What?*, Cambridge: Harvard University Press（出口康夫・久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』岩波書店 2006）.
―― 2002, *Historical Ontology*, Cambridge: Harvard University Press.
林原玲洋 2013 「社会問題の構築とレトリック――論法・転義・同一化」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房 pp.216-33.
Holstein, James A., and Gale Miller (eds.), 1993, *Reconsidering Social Constructionism: Debates in Social Problems Theory*, New York, Aldine de Gruyter.
Ibarra, Peter R., and John I. Kitsuse, 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," Pp.25-58 in *Reconsidering Social Constructionism*, edited by James A. Holstein and Gale Miller, New York: Aldine de Gruyter（中河伸俊訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素―相互作用論の立場からの社会問題研究のための一提案」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学―論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 46-104 頁 2000）. .
Kitsuse, John I., and Joseph W. Schneider, 1989, "Preface," Pp. xi-xiii in *Images of Issues*, edited by Joel Best, Hawthorne, NY: Aldine de Gruyter.
小宮友根 2017 「構築主義と概念分析の社会学」『社会学評論』269 号 pp.134-149.
中河伸俊 1999 『社会問題の社会学―構築主義アプローチの新展開』世界思想社.
―― 2001 「方法論のジャングルを越えて―構築主義的な質的研究の可能性」『理論と方法』29：31-46.
―― 2004 「構築主義とエンピリカル・リサーチャビリティ」『社会学評論』219: 244-259.
―― 2013 「構築主義で何をするのか―経験的研究の方途の成熟のために」中河伸俊・赤川学編『方法としての構築主義』勁草書房 pp.1-13.
中山康雄 2009 『現代唯名論の構築―歴史の哲学への応用』春秋社.
Merton, Robert K., 1957, *Social Theory and Social Structure*, Free Press (Originally published in 1949； 森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房 1961）.

Merton, Robert K., and Robert A. Nisbet, 1966, *Contemporary Social Problems (2d ed.)*, New York：Harcourt, Brace & World.
三谷太一郎 2017 『日本の近代とは何であったか―問題史的考察』岩波書店.
酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生（編） 2009 『概念分析の社会学―社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.
盛山和夫 1995 『制度論の構図』創文社.
Spector, Malcolm, 1976, "Labeling Theory in *Social Problems*: A Young Journal Launches a New Theory," *Social Problems*, 24: 69–75.
Spector, Malcolm, and John I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cummings（村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築―ラベリング理論をこえて』マルジュ社 1990）.
徳岡秀雄『社会病理を考える』世界思想社 1997.
Winch, Peter, 1958, *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, London: Routledge（森川真規雄訳『社会科学の理念―ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』新曜社 1977）.
Woolgar, Steve(ed.), 1993, *Knowledge and Reflexivity: New Frontiers in the Sociology of Knowledge,* London: Sage.
Woolgar, Steve, and Dorothy Pawluch, 1985a, "Ontological Gerrymandering: The Anatomy of Social Problems Explanations", *Social Problems* 32: 214-227（平英美訳「オントロジカル・ゲリマンダリング―社会問題をめぐる説明の解剖学」平英美・中河伸俊編『構築主義の社会学―論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社 18-45 頁 2000）.
―― 1985b, "How Shall We Move Beyond Constructionism?" *Social Problems* 33: 159-162.